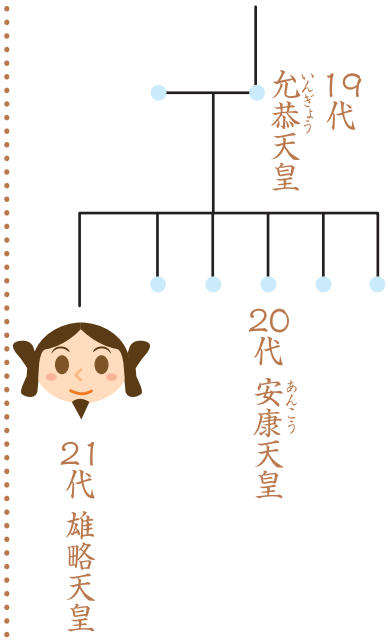
皆さんが暮らす奈良県で編纂された、古事記の世界をのぞいてみませんか？

はじめての古事記

最終回

待ちつづける女性

〈今回の登場人物〉



第二十一代雄略天皇の段には、天皇が王宮から出て、野にいる少女に声をかける話がいくつかあります。同じような話は、『万葉集』の第1番歌にも、雄略天皇の歌として載せられています。

ただし、『万葉集』では、舞台がどこなのかわかりません。一方の雄略記では、おおよその地域が特定でき、話の具体性を高めています。

雄略記には、長谷朝倉宮（桜井市）の近辺や吉野での話が収められています。今回紹介するのは、王宮近辺でのエピソードです。

美和河（三輪地域を流れる大和川）で衣を洗う麗しい少女を見た天皇は、早速声をかけました。

まず天皇は、少女がどこの誰かを尋ねます。この行為を求婚とみる人もいますが、そうではなく、当時は、天皇と豪族との関係が基本でしたので、少女がどの豪族の娘であるかを知りたかったのです。

引田部赤猪子という少女の名を聞いた天皇は、赤猪子を嫁にするので、それまでどこにも嫁がないように伝えました。ところが、いっこうに迎えに来ないまま、八十年も過ぎてしまったのです。

すでに老婆となった赤猪子は、我慢できずに天皇を訪ねに行きます。すると、どうやら天皇は、完全に約束を忘れていたようです。

もはや結婚は無理だと考えた天皇は、代わりに歌を詠みました。赤猪子も歌でこたえました。

赤猪子はあまり納得いかなかったようすでしたが、話はこれ以上展開しません。なんともやりきれない思いだけが残ります。

（本文 万葉文化館　竹本　晃）

編集部の古事記コラム

訪れた赤猪子に、雄略天皇は「大神神社の神聖な樫の木のもとの近寄りがたく神聖な乙女よ」「若い頃に一緒になれば良かったが、歳を取ってしまったよ」という趣旨の歌を、それに対して赤猪子は「大神神社の立派な垣根の築き残しのように神に付き従ってきた私は今は誰に頼ればよいのでしょうか」「美しい蓮の花のような若い人がうらやましいです」という趣旨の歌を詠み合ったそうです。

それにしても80年とは、とても長いですね。

クイズ 古事記ハカセへの道

先月の答え
②推古天皇でした。

一緒に読んできた古事記の世界も今回で最終回じゃ。もうあなたも立派な古事記ハカセじゃよ。これをきっかけに、古事記の世界をもっと深く楽しんでほしいな。奈良には多くのゆかりの地があるんじゃよ♪

6月号からはそんな古事記ゆかりの地を紹介するコーナーが始まる予定じゃよ。5月号からは今回のお話にも登場した、万葉集の世界を紹介するよ。

来月からもお楽しみに♪

まろまろ

問 県広報広聴課　☎0742-27-8326 FAX 0742-22-6904